

只見のブナ林と阿武隈のブナ林

小川試験地のブナ林、只見のブナ林とは
ずいぶん違った相観です。

私たちの研究グループは、福島県の一帯に広がる阿武隈山地の最南端、茨城県北茨城市関本町にある小川という集落の周辺（以下、小川試験地と呼びます）で、ずっとブナ林とその周辺の森林の生物についての研究を進めてきました。今回只見地域で植物や昆虫の調査をするにあたって、小川試験地と只見町という二つの地域の森林景観、そしてこれまでの人々の



生活との関わり
の歴史の間には、
大きな違いと同
時に似通った点
があるのではな
いかと感じてい
ます。

阿武隈山地は、
岩手県の北上山
地と同じく、全
体的に比較的な
だらかな隆起準
平原と呼ばれる
地形が続いてい
ます。温暖な太
平洋側気候の影
響を受けるため
日本海側気候の
影響を強く受け
豪雪地帯である

越後山脈側の只見地域と比べ、
冬の間の降雪量ははるかに少なく、
とても乾燥します。

阿武隈山地では、原生的なブ
ナ林はほとんど残されていません。
原生的な状態を維持した「奥山」
のブナ林が豊富に残された只見
地域との大きな違いです。地形
が緩やかで積雪の少ない阿武隈
山地では、当然のことながら、
只見町で見られる独特な雪食地
形や雪崩植生は見られませんし、
大きなトチノキやサワグルミで
構成される発達した山地溪畔林
もほとんど見られません。そして、
小川試験地周辺の森林には、人
の手が加えられた長い歴史があり、
原生的と考えられるブナ林にも
過去の人間活動（とくに火入れに
起因した山火事と放牧）の影響が
色濃く見られます。

わずかに残された小川試験地
のブナ林（小川群落保護林、福島
県側は朝日山ブナ林）には、只見
町で見られるブナ林とは大きな
違いがあります。只見町のブナ
林では、美しい白い木肌に蘚苔
類の濃い色がアクセントを散ら
したブナの木たちが圧倒的に優
占しています。もちろん、イタ
ヤカエデやホオノキ・ミズナラ・
トチノキといった他の広葉樹も
混じりますが、ブナが圧倒的に
多いことで、独特の美しい景観
を生んでいます。一方、小川試



只見町の里山林。利用されず壮齢になったコナラ林です。真ん中に見えるプラスチックの容器は、昆虫トラップ、その隣は、ハチを捕える竹筒トラップです。

験地のブナ林では、ブナの他に
もう一種類のブナ属の樹木、イ
ヌブナ（灰色の木肌で株立ちする）
の他にコナラ・ミズナラが優占
しており、シデ類やカエデ類、
サクラ類など非常に多くの種類
の広葉樹が混じり合っており、たい
へん多様な、ある意味「里山林」
的な景観となっています。

このブナ林を含む小川試験地
周辺の現在の森林景観全体を見
渡すと、コナラ・クリ・サクラ
類を主体としたさまざまな林齢
の落葉広葉樹二次林とスギ人工
林のモザイク的な景観となつて
います。過去に集落の人々が炭
焼きに利用していた広葉樹林が、
シイタケほだ木やバルブ・チツ
ブ材の原料として、現在も三〇
年周期程度を目安に伐採されて
さまざまな林齢の林が混じり合
って存在しているのです。人が
頻繁に利用することによって形
成された「里山」と呼ばれる地
域の景観が、わずかに維持され
ていると言えます。

他方、只見町では、森林景観
の中心として、伐採などの人手
の入らない「奥山」ブナ林や山
地溪畔林が広大に広がっています。
しかし、ここでも、小川試験地
と同じように人々の生活に利用
されてきた「里山林」が集落の
周辺に形成されてきました。現
在も、ワラビ園の形で残されて

いる草地や焼き畑の農地も広葉
樹二次林の中に存在していたこ
とは、年配の方々の記憶にも鮮
やかなとおりです。しかし、現在
只見町の多くの里山林は人々の
生活との結びつきを弱めつつあ
ります。

小川試験地での研究から、長
い人間活動の影響の下で形成さ
れてきた日本の森林景観の中では、
森林伐採によって作り出される
草地的な環境を好む森林の生き
物たちも多いこと、逆に原生的
な安定した森林環境を必要とす
る生き物たちもあることなどが
わかってきました。只見町での
研究から、また新しい発見があ
ることを期待しています。